

復刻にあたって

◇発達保障への道を拓き続けた生涯

——出会いと別れをふりかえって——

一九五八年八月八日、大津市郊外の南郷の丘にあった滋賀県立「精神薄弱」児施設近江学園に糸賀一雄園長を訪ねた。そして園長宅で岡崎英彦医師（重症心身障害児療育施設びわこ学園初代園長）と田中昌人研究部主任に初めてお会いした。京都大学教育学部の助手であった田中さんが糸賀園長から囑目され学園の職員になって二年目のことである。

当時、私は「特殊教育」を専攻する学生であったが、将来、その仕事に就くことに不安と悩みを抱き、三年生の夏休み、この道の先達を訪ねて教えを乞う旅に出た。戦前に設立された知的障がい者施設を含め、最後は長崎県の「のぎく寮」に近藤益雄先生を訪ねるまでの一七日間におよぶ旅の最初の訪問先が近江学園であった。この「青春の行脚」がその後の私の人生を導くこととなった。それから四七年余、田中さんは良き先輩であり、真実の友であり、志を同じくする同志であった。

二〇〇五年四月一二日、大津市坂本の比叡山延暦寺の麓にある自宅に田中昌人・杉恵夫妻を訪ねた。

田中さんに寺々を案内していただきながら、互いに、これまでとこれからのことについて思うこと、考えることを心から語りあった。それから七か月後、田中さんは逝かれた。新たに大いなる研究に立ち向かおうとする烈々たる気迫と人類の未来への限らない希望を抱きながら……。

田中さんとの最後の語らいで最も胸に焼きついていることの一つは、今後最も力を注ぎたい研究は何かと問いかけたところ、個人の発達・集団の発展・社会の進歩という三つの系の関連構造とそれら三つの発達の系の弁証法的発展の法則性の究明であり、それには五〇年、一〇〇年と未来世代にわたつての実践・研究・運動の継承・発展が必要であると答えられたことである。田中さんの魂の熱く清新な息吹を感じながら私は言った。「それは、戦争をなくし日本国憲法が謳う恒久平和を世界的規模で実現していく道すじの探究でもありますね。そのためにも関連諸科学、社会運動の諸分野の人びとの協力・共同・連帯が一層、広く強く求められていると思います」と。田中さんは黙って深く肯づいた。その時の双眸にこめられた静かで力強い輝きは、青年期の私が魅せられたそれと変わらなかつた。思うに、田中さんの生涯は常に国際的視野をもちつつ日本における発達保障への道を切り拓き続けた歩みであった。

◇新しい世紀に向かって著わされた未完の書として

——『講座 発達保障への道③』の位置と課題——

本書は『みんなのねがい』誌の連載の七回分に多くの資料・図表を補充し加筆したものである。そ

の内容は、副題に「発達をめぐる二つの道」と付しているように、大きく二つに分かれる。前半では、六〇年代末から七〇年代初頭における障がいがある子ども・大人の教育権・労働権侵害の実態と政府の教育・労働行政の責任を厳しく追及している。後半では、「障害の重い児童にたいする指導」と題して、ほぼ同じ時期に重度の「精神薄弱」と呼ばれる子どもたちにたいして対照的な指導を行った日向弘済学園と近江学園をとりあげ、両者の指導の違いの基礎に、「人格発達と結合した能力の発達」を保障しようとしているかどうか、また「教育行政に責任をもつて教育権を保障させていくこと」をめざしているかどうかなどがあることを具体的に指摘している。とりわけ、「近江学園での試み」を「二つの確認と五つの視点」から集团的・継続的に総括している箇所や、著者が療育記録映画『夜明け前の子どもたち』の撮影・編集の一年間、近江学園からびわこ学園へ派遣され、重症心身障がい児の療育実践に参加しながらその理論化にとりこんでいく過程に関する報告などは、全障研運動の発足の時期とも重なり合っていたこともあって、全国的に大きな影響を与えた。

『講座 発達保障への道③』の「主題」と「結論」は本書の冒頭に記されているように「部分人間への『発達』でなく、まず生活の基盤をかためて発達にとりくむ」ことであった。だが、「発達」とはなにか、「発達にとりくむ」とはどうすることなのかについてはいまだ十分には論証し得ていない。著者は本書を「『発達をめぐる二つの道』の中間報告」と位置づけ、「あとがき」で「社会進歩については、主として第四分冊『歴史を切り拓く力』で述べ」ることを予告している。また本文の末尾では「講座『発達保障への道』につづく講座『発達の弁証法』」の構想も記している。これらはそのような

な書名としては公刊されなかった。しかし、卒業論文（一九五五年提出、『発達研究への志』一九九六年、所収）から遺著『障害のある人びとと創る人間教育』二〇〇三年、『日本の高学費をどうするか』二〇〇五年、に至る歩みの中に『講座 発達保障への道』全三分冊を位置づけてみるならば、二一世紀に向かって豊かに結実していく確かな萌芽をそこに見出すことができよう。

田中さんの初期から晩年までの研究方法論をつらぬく特質の一つは、歴史的視野に立つ発達研究と科学的発達観に基づく歴史研究の統一的結合である。京都大学における最終講義（二〇〇五年三月）でも、「二〇〇〇年代から始まる新しい二〇〇〇年紀の出版に求められる人権概念として“development”の概念を規定」し、その実質的内容を「今日の世界史的課題との関連で」解明し、それらを「発達保障の方向で」実現していくことを提唱している（前掲『発達研究への志』参照）。

田中さんが残した著作・講演記録・映画・ビデオ・スライドなどは歴大である。私たちはそれらにこめられ、表現されている比類のない創造的で巨きな知的遺産を、田中さんの人間像や実践・研究・運動の歩みと結びつけ、その生きた時代と関連づけながら、主体的に継承し発展させていきたい。

二〇〇六年八月三〇日、記